

# 生存科学研究ニュース

Vol. 32, No.1 2017.4 発行  
発行 公益財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座 4-5-1  
tel: 03-3563-3518 fax: 03-3567-3608 email: office@seizon.or.jp  
http://seizon.umin.jp

## 2017年度事業計画

2017年度事業計画は、2017年3月14日(火)第2回理事会の承認を経て、以下の通り決定いたしました。

### 自主研究

1. 医療政策研究会  
研究責任者 神谷 恵子  
神谷法律事務所 弁護士
2. 資本主義の教養学—人間の生存と資本主義  
経済との関わりについての包括的研究  
研究責任者 堀内 勉  
多摩大学大学院特任教授
3. 健康価値創造研究会  
研究責任者 森本 兼曩  
(一財)産業医学研究財団・常務理事
4. ライフイノベーションの展開に伴う倫理的・法的・社会的検討  
研究責任者 河原 直人  
九州大学ARO次世代医療センター
5. 対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造  
研究責任者 吉田 浩子  
人間総合科学大学 教授
6. 沖縄と日本の比較の視点から社会とwell-beingを考える研究会  
研究責任者 等々力 英美  
琉球大学熱帯生物圏研究センター薬学博士
7. 少子高齢化時代の都市型災害対策;Health・Coexistence・Well-beingを意識した社会基盤システムの検討  
研究責任者 坪内 暁子  
順天堂大学大学院医学研究科研究基盤センター分室、助教
8. 老人観の転換による持続可能社会の展望  
～比較的元気な老人による同世代・多世代への積極的関与～  
研究責任者 森下 直貴  
浜松医科大学 教授
9. 健康の社会的決定要因としてのソーシャル  
キャピタル研究会  
研究責任者 稲葉 陽二  
日本大学法学部政治経済学科・教授
10. 子ども期の貧困や逆境体験と認知症及び要介護  
リスクに関するライフコース研究：予防政策の  
提言へ向けて

研究責任者 藤原 武男  
東京医科歯科大学 大学院医歯学総合  
研究科国際健康推進医学分野教授

11. 生存科学とエンパワメント実践に関する研究  
研究責任者 安梅 勅江  
筑波大学人間総合科学研究科 教授

### 助成研究

1. 認知症介護における心理社会的研究
  - (1) アウトリーチ型認知症困難事例対応事業の対象となる高齢者に関する調査  
研究責任者 井藤 佳恵  
都立松沢病院 精神科
  - (2) 認知症の人の地域生活を支える在宅訪問医療の課題と可能性に関する研究  
研究責任者 遠矢 純一郎  
医療法人社団プラタナス
  - (3) 権利を基礎とする認知症医療・介護の在り方に関する研究  
研究責任者 山崎 英樹  
清山会医療福祉グループいずみの杜診療所
  - (4) コ・プロダクション・アプローチによる認知症にやさしい地域づくりとその評価  
研究責任者 西田 淳志  
東京都医学総合研究所
  - (5) 認知症医療・介護に携わる地域人材の行動心理  
症状に対する心理社会的アプローチ  
研究責任者 中西 三春  
東京都医学総合研究所
  - (6) 認知症の人による認知症施策評価実施のあり方に関する研究  
研究責任者 武地 一  
藤田保健衛生大学医学部 教授
2. 被災地支援に関わる防災学的研究  
東北被災地における津波減災を目的とした「生存科学の森」(仮)づくり  
研究責任者 森の防潮堤協会
3. 助成出版事業
  - (1) 『代替医療』(仮題)書籍出版  
研究責任者 津谷 喜一郎  
東京有明医療大学保健医療学部特任教授
  - (2) 生存科学叢書  
研究責任者 藤原 成一  
日本大学芸術学部

## 第2回「子ども期の貧困や逆境体験と認知症及び要介護リスクに関するライフコース」研究会

2017年1月19日(木)16:30-18:30に、東京医科歯科大学にて、表記研究会を開催した。2つの話題提供講演、村山 洋(東京大学高齢社会総合研究機構)「幼少期の社会経済状態(Socio-Economic Status: SES)と生活機能低下の関連性」と、菖蒲川由郷(新潟大学国際保健学分野)「ライフコースでみるデータに基づく健康なまちづくり～十日町調査の紹介」を受けて、幼少期のSESが高齢期に与える影響や今後実施すべき調査について、幼少期や老年期をテーマとする公衆衛生学の研究者・臨床家12名で意見交換がなされた。高齢期における健康問題の対策として幼少期からの介入の必要性は説かれているが、幼少期における介入可能な要因の探索に関するエビデンスはあまり蓄積されておらず、貴重な解析結果や調査計画に参加者から高い関心が寄せられた。

村山の講演では、幼少期のSESと高齢期における生活機能や認知機能障害について、65歳以上の非要介護認定高齢者を対象とした2つのデータ(2010年度日本老年学的評価研究データ、2016年度足立区高齢者全数質問紙調査)の解析結果が報告された。

前者のデータ解析からは、幼少期SESが低いことと高齢期における生活機能は関連していたが、幼少期SESは成人期SESを介して影響しているのか、独立した影響力を持つのかについては世代間で差異が認められたことが紹介された。その理由として幼少期の経験や世情が大きく影響している可能性が指摘された。

後者のデータ解析からは、幼少期のSESと自記式認知症チェックリストを用いた認知機能障害について、関連性が見られたことが報告された。関連性の強さは世代間で差異があり、生活機能同様、幼少期の経験や世情の影響の影響が指摘された。また、関連性の強さは男女差も認められ、生存バイアスの可能性も指摘された。菖蒲川の講演では、中山間地域に位置する超高齢社会、新潟県十日町で現在進行中の農村部高齢者の健康長寿の要因に関する研究が紹介された。多施設共同研究による高齢者の健康状態を包括的に測定する手法や、認知症発症をアウトカムとした最先端の研究手法が紹介された。

ついで、全体で、脳内を含む器質的な変化から生活様式への影響まで、幼少期SESと高齢期にお

ける健康状態との関連性を説明するメカニズムについて幅広い可能性が議論された。幼少期SESの測定時期や項目、高齢期に



おける質問紙調査の対象者や測定方法など、ライフコース研究における幾つかの課題について、情報が共有された。さらに、認知症患者が増加する中で我々が目指すべき社会の姿とは何か、科学的妥当性・新規性および疫学的研究として実現可能な認知機能・非認知機能の測定方法とは何か、それらを予見する要因とは何か、全体で活発な議論が行われた。

(藤原武男)

## 第1回「ライフイノベーションの展開に伴う倫理的・法的・社会的検討」研究会



2016年8月6日(土)18:00-20:00九州大学有楽町オフィスにて、第1回研究会を開催した。

出席者は、当方の他、アッセマ庸代(南山大学)、大林雅之(東洋英和女学院大学)、高木美也子(日本大学)、瀧本禎之(東京大学)、松田正巳(東京家政学院大学)、村岡 潔(佛教大学)、森下直貴(浜松医科大学)であった。

当研究会の射程は、今般、科学技術政策の重要課題の一つである「ライフイノベーション」の問題領域であるが、具体的には、再生医療、難治性疾患・希少疾患、神経疾患、がんの克服、個別化医療、基礎から臨床応用に係る規制やグローバル化への対応など、多岐に及ぶ。

本研究の最終的な目標は、こうしたライフサイエンス政策動向を俯瞰しつつ、その適正な推進に必要な不可欠となる倫理的・法的・社会的諸問題の論点整理をはかり、学際的な見地から検討をはかることで、人類生存に貢献する理論的基盤構築のための一助となる知見を提示することである。

併せて、たえず進展するライフサイエンス分野をダイナミックに捉えることで、問題領域の動向を把握し、そこに内包され続ける根源的な人類生存の問いについても考究していきたい。

第1回目のお集まりでは、研究代表から先端医療・医科学技術に係るイノベーションに関して、昨今の政策動向及び規制に係る課題に着眼した講演を行った。特に、昨今の研究倫理指針や臨床研究法案等の策定の動向もふまえ、これからの医療・医学の進展に伴う不確実性への対処のあり方などについて問題提起を行った。

その上で、メンバーとともに、当該テーマに係る問題意識の共有化をはかったところ、ひとつの重要な論点として「因果性」に着眼する意義が提起された。これをふまえ、当研究会では、まずは今日の先端医療・医科学技術にある「因果性」に留意しつつ、参加者それぞれのバックグラウンドに根ざした議論を展開することで申し合わせが行われた。

当研究会は、多分野の専門家によって構成される

が、今後も必要に応じてメンバーから時宜を得た話題を提供いただきながら、議論を深化させていければと考えている。

(河原直人)

## 第 1 回 沖縄と日本の比較の視点から社会と well-being を考える研究会

2016年5月14日(土) 13:20-14:30に東京都千代田区の日本大学法学部本館2階121講堂で表記研究会を開催した。研究会参加者は、メンバー以外の研究者(公衆衛生,社会学,経済学,民俗学など)も含めて約30名が出席した。

講演は、『武見太郎と勝沼晴雄からみた「生存・保健医療・沖縄」』丸井英二(人間総合科学大学人間科学部)にお願いをした。

最初に丸井は、武見太郎と勝沼晴雄の人物像について、両者の生い立ちから詳しく紹介された。両者とも、本土復帰前後の沖縄の保健医療体制、特に琉球大学保健学部(現在医学部)の創設の立ち上げに関わり、沖縄との関係は深い。武見太郎の人物像については、重層的であり、巷に伝えられているような「ケンカ太郎」のような表面的面では表現しにくい。丸井が示された最初のスライドは武見の3つの顔写真が示された。確かに、それぞれの顔写真は3つの異なった印象を持つものであった。武見は、医学の在り方について、その根本は生存の理法に基づく生存科学を提唱されたが、その精神的なよりどころとして、仏教哲学があったのではないかと。

勝沼は、東大医学部教授として公衆衛生学教室を主宰され、多くの人材を育てたが、武見が日本医師会長の在任期間中、医療行政に関わるブレーンとして武見をサポートした。彼が武見を支えた医療の提言は、今日のわが国の医療行政の根幹的な潮流をなすものといえよう。

つぎに丸井は「生存科学とはなにか」を、武見の考えをスライドで、その概略を以下に述べられた。「生存科学」とは、武見が医学の科学的基盤を模索するなかで到達した、包括的、学際的、総合的な学問体系概念モデルである。とはいえ、完結した概念モデルというよりは、むしろ人間について考えるあらゆる人びとにつねに問いかけ挑戦し続ける概念である。

武見は、医学とは何か、医学は何をなすべきかという問いに答えるために、その根幹にある基盤科学として生存の理法に基づく生存科学を構想し、本来は広義の医学概念であるライフサイエンスとして提唱した。しかし生存科学は医学概念にとどまらない。人類の生存秩序を、個人の生存の場から、集団としての地球的規模における全人類の生存の場まで包括的にとらえようとする学問である。

最後に、丸井は、武見と勝沼と沖縄の関わりについて、中村哲論文(2003)を基に述べられた。それは、

1968年の琉球大学保健学部設立について、武見・勝沼の構想(1967)が設立の概念となっていたことである。武見・勝沼の立案とは、(1)包括医療(comprehensiveness, community medicine)、(2)生態系のなかで生きている人間、(3)生物としての人間と環境を一体のものとして把握、(4)健康増進、疾病予防、治療、リハビリテーションを一貫したつながりとしてサービスを担う内容を持った構想であった。この構想は、半世紀前のものであるが、現在の視点から見ても斬新な内容である。

この構想が琉球大学において実現していれば、我が国の医学教育の流れは大きく変わっていたかもしれない。(等々力英美)

## 第2回「老人観の転換による持続可能社会の展望」研究会

表記研究会は、シンポジウム「高齢者介護現場の声を通じて<老いの中の死>を考える」として2017年2月12日(日) 13:30-17:00 場所是有楽町にある九州大学東京オフィスで開催された。

以下シンポジウムの言葉を述べる。

日本はいま「超高齢社会」に移行しつつある。この中で貧富の二極化を含めて問題が山積しているが、労働市場・社会保障制度・共助機能・人生観・死生観のすべてに渡って重要な位置を占めるのが老人世代である。この老人世代を窓口としそこから現代社会を問い直し、持続可能な未来の社会を創り出すために三年前「老成学」を創設した。「老成」という言葉には、老いゆくプロセスそのものに着目しこれを不断に意味づけ直すという視点を込められている。

老人世代による多様な「コミュニティ形成」が未来社会の在り方を左右するとすれば、その主役となるのは60歳代後半から80歳代前半までの老人である。それでは、80歳代後半以降の最晩年期の老人についてはどのように扱えばいいのか。これは総合的な老人観の樹立を目指す老成学にとって避けて通れない問題である。

2015年現在、最晩年期の老人はすでに500万人を大きく超えている。さらに百寿者では約65,000人に達する。ところが、彼らの多くは「希望」をもっていないように見える。施設にいる老人は介護者の指示をひたすら受け入れるだけだし、地域で暮らす老人は静かに消えていくことを待つだけである。人類史上これまで最晩年期の老人は例外的な存在であったから、あえて生の意味を問われる必要はなかった。しかし、これほど大群になると事情は違ってくる。ここに最晩年期における「生と死」を意味づけ直すという課題が浮上する。

第一部では介護現場に詳しい三人の方に話題提供をお願いした。続く第二部では特定質問者との間の質疑応答を受けて、参加者全員による総合討論を行った。

介護支援専門職の経験のある上原真理(フリーの編集者)は、まず、慢性的な介護スタッフ不足の背景を問題にした。彼女によれば、理想的な施設の条件と照らし合わせるとき、決定的な要因として「介護という仕事」の評価に行き当たる。介護は生活経験の雑学(あるいは生きた知恵)であるが、これが医学やとくに看護学からは正当に評価されず、介護スタッフが仕事に「誇り」を持ってない理由となっている。続いて、老いや死の迎え方を問題にし、「安心・安全な老後」という綺麗事に終始するジェロントロジーの風潮を批判した。ここでもキーワードは老人/死者になるための「誇り」である。

日本思想史の研究者である平山 洋(静岡県立大学)は、特定難病のため要介護5となった母親を世話する体験を物語った。独身の長男として数年前から同居し、自宅と勤務先とを長距離日帰りで行き交わしながら世話を続ける。ところが母親の状態が急速に悪化し、今では胃瘻と経管栄養を必要とする。そのような日々を送る中で自問自答する。要介護4までは育児に似ているが、要介護5は農業に似ている。とすれば「収穫」とは何か? 介護することによって得られるものとは何か?

精神科医の菅原一晃(自治医科大学)は、地域の総合病院での診療経験を通じて医療の現状を問題にする。精神科外来と精神病棟に認知症患者が増えるに伴い、「拘束」からの解放という理念とは逆行する動きが生じている。自宅か施設かという選択肢の貧困、受診時における家族主導、病名告知、検査被曝、医師側の力量、拘束・鎮静、介護保険、薬の過剰投与と副作用といった問題点を具体的に挙げながら、日々疑問を持ちながら診療に携わると語る。その上で良い医療化とは何か、医師にとって納得できる介入はいかにあるべきかと問いかける。

特定質問と総合討論では種々の論点が出された。良い介護施設の条件、看護師と介護士の関係、自宅で親を介護する独身の子ども、親を介護する文化の変容、働きながら介護できる制度、コミュニティの規模と介護の質、「劣った死」という捉え方、誇り(プライド)の必要性、訪問看護師という存在、外国人介護者の導入、等々。これらの論点は、労働市場・社会保障制度・共助機能・人生観・死生観という分野、並びに、老人の生における働・性・病・死といった主要関心事と通底している。

今回のシンポジウムで出された介護現場の「声」は、少数ではあったが論点としてはほとんどすべてを網羅している。「老人」と「介護」という窓から見ると、老人世代

にとっての問題は同時にすべての世代にとっての問題でもある。今回はその点を改めて確認することができたように思う。

(森下直貴)

## 寄贈図書



著者: 門田美恵子  
吉田浩子  
青木 清 (監修)  
題名: 子どもの生活と  
心身の健康  
出版社: 産業図書株式会社  
定価: 1500 円+税

## 研究会日報

- 1月 12日 (木) みらいエンパワメントカフェ
- 1月 19日 (木) 子ども期の貧困や逆境体験と認知症及び要介護リスクに関するライフコース研究
- 1月 29日 (日) 対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造研究会
- 2月 2日 (木) みらいエンパワメントカフェ
- 2月 3日 (金) 資本主義研究会
- 2月 12日 (日) 老人観の転換による持続可能社会の展望 シンポジウム
- 2月 21日 (火) 少子高齢化時代の都市型災害対策研究会
- 2月 23日 (木) 子ども期の貧困や逆境体験と認知症及び要介護リスクに関するライフコース研究
- 2月 24日 (金) 健康価値創造研究会
- 2月 25日 (土) ライフイノベーションの展開に伴う倫理的・法的・社会的検討
- 2月 27日 (月) 常務理事会
- 3月 5日 (日) みらいエンパワメントカフェ
- 3月 6日 (月) 対人支援職者の倫理的行動と倫理観の構造研究会
- 3月 9日 (木) 医療政策研究会
- 3月 14日 (火) 理事会
- 3月 21日 (火) 少子高齢化時代の都市型災害対策研究会
- 3月 27日 (月) 沖縄と日本の比較の視点から社会とwell-beingを考える研究会
- 3月 27日 (月) 健康の社会的決定要因としてのソーシャルキャピタル研究会
- 3月 31日 (金) 医療政策研究会

